
【零長編小説】白き華舞う刻

蒼緋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【零長編小説】白き華舞う刻

【Nコード】

N8728S

【作者名】

蒼緋

【あらすじ】

とある閉ざされた村…。そこから逃げてきた、巫女となるはずだった娘…。すべては、彼女を中心に回り始める。くるくる…。狂々と…。何故自分は生きているのだろうか？自分は生きていてもいいのだろうか？その答えを…。彼女は、少しずつ見つけていく。その先に見える答えとは一体…？

【(必読) 小説特殊設定について】(前書き)

まずは必ずこちらの設定をお読みください!!特にヒロインの事についてはオリジナル設定が多いので、必読です!!あと、零のキャラでも一部特殊設定の男がおりますので…必ず読んで下さい(笑)なお、こちらの内容は、小説が進むにつれて修正・加筆されます。修正・加筆があった場合は活動報告でご連絡致します。

【（必読）小説特殊設定について】

【オリジナルキャラ&零キャラ特殊設定】

月成 つきなり 雪華 / 年齢：語開始時15歳 本編20歳

水落村に伝わる儀式の巫女として、紅い髪・紅い瞳を持つて産まれた女。稀に見る強い力の持ち主で、巫かんなきとしての力も備えている。自分の運命を知った上で儀式に望むつもりでいたが、彼女の両親と兄である朔夜さくやが彼女を儀式などで死なせたくないと願い、月成家の家宝である玉刀たまがみを持たせて村から逃がした。その際、崖から転落して水落村での記憶と自分の本名の記憶の一切を失う。強い霊能力を使い、霊を祓うことが出来るが自らその力を率先して使うことは無い。麻生家（優雨の親戚）の者に助けられ、名を“麻生 朔夜”と名乗り生きていく。自分の中に眠る“ありえないものを見る力”と、目立つ紅い髪・紅い瞳のせいもあり、周りの人間は雪華を異端視したが、親戚にあたる優雨、そして大学で知り合い、同じような力を持つ天倉 螢、後に就職先で知り合う雛咲 真冬に心を許した。彼らとの出会いを経て、雪華の運命は大きく動き始める。失った記憶、自分が産まれてきた意味、髪が紅い理由：そのすべてが明らかとなる。いつもは長い紅い髪をまとめてアップにしているが、腰元まで伸ばしている。本人は無自覚だがとても美人。しかし、異端な容姿を不気味がつて誰も近づこうとしない。容姿はとても美しいが、口調や素行は男っぽく、お世辞にもお淑やかとは言えない。

月成 つきなり 朔夜 / 年齢：雪華を逃がした時25歳

月成 雪華の兄で、月成家の長男。妹である雪華の巫女としての定めを全て知り、両親の切なる願いから妹と共に水落村の逃走を試みる。しかし逃げている途中に村人達に追いつかれそうになり、雪華を崖から落として妹だけを村の外へと逃がした。その後、雪華を逃

がした罪を咎められて捕まり、巫の言伝により、“もう一つの知られざる儀式”によって命を落とす。強い力は持っていないが、その人の瞳を見るだけで感情を読み取る事が出来る。

天倉 螢 / 年齢：雪華と初めて出会った時20歳

天倉静の弟で、天倉 繭・漣の叔父。漣と繭は螢の事を“螢兄さん”と呼び、本当の兄のように慕っている。都市伝説や民俗学などに興味を持ち、大学へと進む。稀に見る強い霊能力を持っており、それ故、よく幽霊に付きまとわれる。螢自身には被ったりする力が無い為、永遠ととり憑いた霊と交渉して何とかお引取り願っている。性格はとても真面目だが明るく、基本誰とでも友好的に話せる。特殊な体質ではあるが、それを不気味がることなく、彼に周りには山の友が居る。その中でもとりわけ仲がいいのが、高校時代の後輩の麻生 優雨で、螢のよき理解者でよき友。ある日、大学の中庭を歩いていたら、派手な紅い髪の女性と出会う。それが、雪華と螢の出会いだった。そこから、螢の運命が大きく変わる…。

当小説の最初の話の時点では（ヒロインと螢の出会い話時点）、螢は強い霊能力を持っているという本家零とは違う設定になっています。

【用語説明】

こちらは、主にヒロイン関連のオリジナル用語説明となります。話が進むにつれて、新たな項目が追加されたり、元ある項目に新たに追記されたりします。

水落村

山奥にひっそりとある集落。外との交流を一切断ち切っている為、水落村の多くは謎に包まれている。この村にしか咲かない花や、この村で行われる特殊な儀式があるとされている。また、この村には周期的に“紅い髪・紅い瞳”の子供が生まれ、その子供は神の元へ

と送らねばならないとされていて、この村で行われる儀式に深くかかわってくる。水落村の入り口には白い鳥居が立ち、その周辺には見たことのない真っ白の美しい花が咲き乱れている。水落村の周辺では“神隠し”が頻繁に起きていて、他の村人達は“神隠しに遭った者は水落村の神に食われた”と噂している。また、村の間人は大なり小なり、何らかの不思議な力を持って生まれることが多い。

巫女と儀式

水落村に生まれる“紅い髪・紅い瞳”の子供は、神より力を授けられし者として、15歳になると同時に、村に伝わる儀式の巫女（男の場合は御巫。読み方は同じ。）となることが定められている。しかしその儀式の詳細は、儀式に深く関わるとされる祭主と四大当主一部の儀式の関係者にしか知られていない。巫女は、強い霊能力を持って生まれることが多い。

かんなぎ 巫

夢見とも呼ばれる。巫とは、過去に起きたこと、また未来に起きることを夢に見て予言をする者のこと。巫女とは違い、髪の色は紅くなく巫女になることは無い（稀に巫女に巫の力が宿ることもある）。巫の役目は、主に先に起こる吉凶の占いで、儀式の日取りや“もう一つの知られざる儀式”の人柱じんちゆうを決める時にその力を使う。また強い力を持つ者は、人に少し触れるだけでその人の過去を見ることができると言われている。巫女同様、不思議な力（霊能力）を持っていることが多い。また巫女とは違い、巫は“神の僕”しんめと信じられており、巫の言葉は神の言葉と敬われている。

じんちゆう 人柱

“もう一つの知られざる儀式”で最も重要となる存在。本来行われる“紅い髪・紅い瞳”の子供を贄とした儀式が何らかの理由で失敗した場合に、巫女に最も近い親族から選ばれる（理由は、儀式の

失敗は親族の不当な行いが原因とされる為、親族の中でも最も罪の重いとされるものが選ばれる。巫の夢かんなき、そして占いにより人柱となる存在を決め、“もう一つの知られざる儀式”の生贄となる者が決まる。人柱がどういった役割を果たすのかは、村長・四大当主・儀式の一部関係者以外は誰も知らない。

水落村の村長と四大当主

水落村で行われる儀式で最も重要となる村の村長兼祭主と当主達。

・櫻坂家おうさかけ

水落村の村長にして、儀式の祭主を務める最高権力者。

・月成家つきなりけ

代々、水落村の四大当主を務める家系のひとつ。儀式の際には宮司を務める。

・柁木家せいのけ

代々、水落村の四大当主を務める家系のひとつ。儀式の際には宮司を務める。

・草薙家くさなぎけ

代々、水落村の四大当主を務める家系のひとつ。儀式の際には宮司を務める。

・風音家かざおとけ

代々、水落村の四大当主を務める家系のひとつ。儀式の際には宮司を務める。

神隠し

水落村近辺では神隠しが多発しており、周りの村人達は“水落村に近づくると神隠しに遭う。神隠しに遭った者は水落村の神に食われた。”と恐れている。水落村の実態調査の為に、民俗学者や調査員が派遣されたがそのまま行方不明となることが多発した為、民俗学者関係者達の間では“水落村には触れるべからず”という暗黙のルールがある。

雪花草せつかそう

水落村にのみ咲く花。その花は四季を問わず、1年中咲いている。村の至る所に咲くその花の色は雪のように白いことからこのように呼ばれている。場所によっては血のように赤い雪花草も咲くらしいが、その理由は分かっていない。

玉刀たまはち

月成家に代々伝わる家宝。一見小刀のようにも見えるが、巫石を切り出して作られた小刀で、人を斬る事はできない。巫石と同じ石から切り出されているが、巫女が持たされる巫石とは違い、玉刀は青色をしている。ありえないもの（霊）を斬ったり、その魂を本来あるべき場所へ送ったりする為に作られたもの。霊能力のある人間にしか使えない小刀。雪華を水落村から逃がす際に、両親が彼女に持たせる。全ての記憶を失っている雪華だが、この小刀の扱い方は触れた瞬間にすぐに分かった。

【(必読)小説特殊設定について】(後書き)

2011・04・30 作成

【一ノ刻】 01：決別と出会い（前書き）

決められた儀式、決められた運命…。それに逆らうことは難しく、
否と唱えれば確実に咎められる。それでも…守りたいものがあつた
のだ。自分の命を掛けても守りたいなどと言ったら…笑われてしま
うだろうか？けれど、それほどまでに…俺にとって、この子は大事
だった…。

【一ノ刻】 01：決別と出会い

ずっとずっと恐れていたことがあった。自分の妹が“紅い髪・紅い瞳”だった時から…ずっと、ずっと。

この水落村みづおちむらには、信仰している儀式がある。その巫女に選ばれるのが“紅い髪・紅い瞳の子供”だ。

「兄さん…兄さん…っ！！」

早く逃がさなければ。

これが…俺達、月成家つきなりの願いだった。俺は月成家の長男として生まれ、そして妹は…悲しい宿命と同時にこの世界に生まれてきてしまった。紅い髪と紅い瞳は神の力を分け与えられた象徴とされ、それを神に返上しなければ村に災厄が降り掛かるのだと…そんな言い伝えがある。儀式によって、紅い髪と瞳を持って生まれた者は…15歳になると同時に巫女となり、そのまま…消える。その後、どうなるのかは分からない。だが、巫女となった者は誰1人として村には戻ってこなかった。そして…俺達の両親は、その儀式の四大当主のうちの一つ。儀式のすべてを知っている両親は、妹がその宿命を負って生まれてきたことに、深い悲しみを感じていた。決して、儀式の内容は話してはくれなかったが…しかし、それですべてを悟った。この儀式に、妹を差し出してしまえば…妹は確実に居なくなってしまうのだと。ただ村から去っていくのではない。両親の悲しみの瞳から読み取れた感情は…

妹の死を嘆くものだった。

この村の人間には大なり小なり不思議な力が宿る。俺も例外ではないのだが…生憎俺の力はとても弱く、あまり役に立たないと言っても過言ではない。しかし、瞳を見るだけで…その人の感情を感じることができるので。あの時の両親から感じたのは、深い悲しみ。そして…謝罪の感情だった。

悲しい宿命を背負わせてしまった事に対する謝罪…。

誰も悪くない。父も母も決して悪くは無い。もし、悪という存在を決めるとすれば、それは…この村そのものなのだ。

ある日、妹が眠った後…父と母が俺を密かに呼び出した。何事かと思っただ、その表情はとても真剣で…そして、発せられた言葉は…

『朔夜よ、これから私達が言うことをよく聞きなさい。』

『父さん…？』

『貴方しか、頼れる人はいないの…』

『母さん？』

父と母の…

『儀式の日が決まったら…あの子を連れて、共に村から逃げる。』

『っ…！！父さん、何を言って…！？あの子を逃がしたら俺は村に戻る！！でなければ、父さんと母さんが…！！』

『覚悟の上よ。私達はね、朔夜…。貴方にも、そしてあの子にも生きてほしいの。だから…』

『いいな？必ず、2人で共に逃げるんだ。決して誰も見つからない場所へ。』

『そして、幸せに暮らしなさい。それが私達の望みで、私達の幸せ…。そうよね、あなた？』

『ああ…。だから、分かるな？朔夜…。お前があの子を守るんだ。ずっと、ずっと…』

『父さん、母さん…』

覚悟だった。

前から儀式に疑問を抱いていた両親。しかし長年、四大当主として仕えていた家系だった為、最高権力者である櫻坂家おひさかの祭主に意見などできるはずも無かった。

だから、両親と俺は密かに妹を村から逃がす計画を立てたのだ。15歳になり、儀式の日が決まったその日に妹を連れて逃げる手はずを。

何が村の守り神だ。何が神の力だ。

儀式なんて…ただの人殺しの行為ではないか…！！

「兄さん、どう…したの…？」

白い着物に白い帯を身に付けた俺の妹。今日は…妹の儀式の日。巫かんなぎの占いにより、本日がその日だと祭主から告げられた。今日…この子は儀式を受ける。巫の見た夢は絶対とされ、それが覆る事は無い。急がなければ、早く村から逃げなければ…！！

「大丈夫だ、俺を信じろ…。お前を儀式の贄などには絶対にさせない…。」

「けれど兄さん、それが私の使命なのでは…」
「違う！！そんなの…間違っている…！！」

ギョツと妹の肩を掴み、自分の胸へと抱きしめた。

「父さんと母さんは俺達が生きる事を望んでいた。幸せになる事を望んでいた。だったら、俺達は村から逃げて、生きて…立派な人間にならなければならない…！！」

「立派な…人間…？」

「そうだ。誰にでも誇れるような人間に…。この村みたいに、誰かの命を犠牲にするような儀式に縋り、そこから安心を得るような人間になんか…なったら駄目だ！！この儀式は…間違ってる…！！」

「兄さん…」

妹は儀式の全てを知っている。どんな儀式が行われ、自分がどんな最期を迎えるのか…。その全てを知っている。俺はそれを知らない。だから、妹の不安がどれほどのものか分からない。けれど…恐らく、逃げ出したくなるほど恐ろしかったに違いない。それでもこの子は、両親と俺の前で儀式の日が決まったその日に…気丈に笑って言ったんだ。

『この宿命を受けたことを、私は心より誇りに思っています。村を守るため…私は月成家の巫女として、喜んでこの身を村へと捧げます。』

しかし勿論、そんなのは本音なんかではなく…。たった1人で、妹は泣いていた。誰にも知られないようにと…知られてはならないと、そう思ったんだろう。自室で1人…

『怖いっ…怖いよっ…。死にたくないよあつ…。父さん、母さん、兄さん…っ…!!』

泣いていた。

それを両親に告げてしばらくした後、両親が妹を逃がす計画を持ち出してきた。最初は妹だけを逃がすはずだったが、両親は俺と妹2人で共に逃げる事を告げた。この村には、儀式に失敗したり、何らかの事情で儀式が行えなかった時に行われる、陰なる祭りがある。その詳細は…四大当主以外は誰も知らない。もちろん、両親は知っている。知っているが故…俺達2人を逃がそうとしたのかもしれない。

2人で逃げた後のことなんか分からない。両親が…どんな仕打ちを受けるかなんて…考えたくもない。それでも、俺達は逃げなければならぬんだ。両親の意志を、決して無駄にしないために…。

「大丈夫…、大丈夫だ。絶対に、何があってもお前を守るから…！俺が守るから…！！だから、早く逃げるぞ！！」

「兄さん、けどこんな事したら…父さんと母さんが…！！」

「大丈夫、父さんは四大当主の1人だぞ？きつと祭主様に掛け合ってくれる…！！」

「兄さん…」

俺を不安そうに見つめる双方の瞳。髪と同じ…夕日のように優しい紅。髪にそつと触れ、安心させるように俺は笑った。

「お前は何も心配しないでいい…。父さん達は絶対に大丈夫。」

妹に言い聞かせるように何度も、両親は大丈夫だからと口にした。それは、俺自身に言い聞かせるためだったのかもしれない。

本当は…大丈夫なんかじゃない。そんなことは分かっている。

けれど…大丈夫だと信じたい。巫の占いが変わると信じたい…。

「ほら、足を止めるな！！走るぞ！！日が暮れる前に山から下りな」と迷ってしまおう！！それに急がないと、追っ手が…」

その時だった。

「追え！！まだこの近くにいるはずだ！！決して逃がすな！！巫女様を捕らるる！！」

追っ手の声が聞こえる。

「くそっ…近くまで来てたか…！！」

「やっぱり戻ろう、兄さん！！今戻れば、きっと祭主様も父さん達を許して下さるし、兄さんのことだって許して下さるはず。だから、戻ろう？私が巫女となって、儀式を行えば…！！」

切に訴えるその声は、本当に俺達のことを心配してくれているのだろう。それは嬉しくもあり、そして悲しくもあった。

矛盾していることは分かっている。

しかし…妹が思うのと同じように両親も、そして俺も…“この子だけは死なせたくない”と…そう思っているんだ。可愛い娘に…妹に、そんな思いをさせたくはなかった。これは…血縁者なら誰もが願う

事だろう…？

「何処ですか、月成様！！」

「お戻りください、巫女様！！貴方が居なければ儀式は執り行えません！！」

好き勝手なことを喚く村人たちの言葉に、また妹の表情が悲しげに揺れた。

「いいから足を動かすんだ。山を下つて暫く歩けば町に出る。そこで一晩明かして、遠くに逃げればいい。だから…」

「……けれど、そしたら村が…父さんが…母さんが…」

駄目だ…、もう妹の足は動かない。村人の声、そして両親を想う気持ち持が…妹の足を止めてしまった。山はあと少しで下ることが出来るはず。随分と長い時間走ってきたから…。チラリと腕時計に視線を落とせば、時刻は18時を指していた。このままでは…

「ごめん、父さん…母さん…。言いつけを破る事になるけど………こいつだけは生かすから…許してくれ……！！」

「兄…さん？」

強行手段になるが…この際しようがない。両親の計画とは大きく異なってしまうけれど…俺はこうなる事もどこかで覚悟していた。

すまない…！！

「歯を食いしばれ。舌を噛むなよ……！！」

「兄さん！？」

足が止まってしまった妹の身体を無理矢理引きずり、茂みの奥へと突き進む。そして…

「ごめんな？一緒に逃げようって約束した。お前を守るって約束したけど……さようならだ……」

「……！！いや、嫌だよ兄さん！！」

俺は…

「俺達の方まで幸せになれ……！！」

「朔夜兄さん！！」

妹を崖から突き落とすことを決めた。崖と言っても、高さは大して無い。下は草が茂っているからそれがクッションになるはずだ。

「お前の兄さんでいられた事を俺は嬉しく思うよ。きっと、父さんと母さんもお前を娘として産んだ事を誇りに思ってるはずだ……」

「嫌、嫌だよ！！離れたくないよ！！兄さん、兄さん！！」

俺の服をきつく握っていたその手を無理矢理引き剥がし、そして…

「生きる、雪華……！！」

妹を…雪華を…

「いやああああッ！！！！」

崖の下へと落とした。悲しげな雪華の声が木霊する。それを聞きつけた村人が、すぐに俺のところに来るだろう。少しでも早く、そして遠くに逃げてここから離れなければ……！！

「今の声は雪華様の声か!？」
「どちらからだ!？」

村人達の声が聞こえる。囷となつて逃げるんだつたら、見つかるように逃げればいい。わざと大きな音を立てながら逃げると、「こつちだ!」「近いぞ!」という村人達の声が聞こえてくる。そうだ、それでいい。俺を追つて来い。そうすれば、雪華は助かる。

雪華…ちよつと乱暴な手段だったけど…ごめんな?けれど、それでも…分かつて欲しい。

俺は…

「……見つけましたよ、朔夜様。」
「あーあ、見ってしまったかあ……」
「朔夜様、巫女様は…雪華様は何処に？」
「知らないね…。俺も雪華とはぐれたんだ。さつき、悲鳴も聞こえたし…熊にでも襲われたんじゃないのか？」
「隠し事は貴方の為になりませんよ?さあ、さあ!…雪華様は何処です!?!」

雪華に生きて欲しかった…。

こんな閉ざされた、小さな村ではなく…

「しつこいなあ…。知らないといっているだろうが。俺は雪華とはぐれたんだ…。」

「……いいでしょう。朔夜様を捕らえる。そのまま祭主様と巫様の元へお連れする。それで…全てが決まる筈だ…。」

広い、広い…

日本というこの国で…。

「お前は…」

生きてくれ…。

大丈夫、俺はお前を守ることが出来ないけれど…

雪華に持たせた我が家の家宝がきつと…お前のことを守ってくれるから。

だから、どうか…この先、笑って…

「幸せに…」

それは日暮れの出来事だった。1人の男とその息子が、立ち入ってはならないとされている山の近くを歩いていた。子供は何故入ってはいけないの？と不思議そうに尋ねてきたが、それに父親が答えることは無かった。この山の奥にある村……。山の入り口を進んでいくと、見た事もない白い花が咲き乱れており、その先にはこれまた見たことも無い……。世にも珍しい白い鳥居が立っている。そこが、決して立ち入ってはならない村：“水落村”^{みらくむら}の入り口とされている。しかし、水落村は周りの村との交流を一切断ち切っており、それどころか水落村に近づいた者は決まって行方不明になるといふ噂がある。誰も近寄らない村：隔離された村……。それが、水落村なのだ。ある者は“神の住む村”といい、ある者は“魔物の住む村”という。しかし、近くを通り過ぎながら……。男はどちらも変わりはないと……。そう思っていた。どちらが存在していたとしても、人が行方不明になっていることに変わりはない。

いつしか、誰も……。山には近づかなくなつた。

この親子が近くまで来た理由は、自分の住む町へと帰る為だった。少し遠出をしたため帰りが遅くなつてしまった。いつもの道を通つていては日が暮れてしまつと判断し、あまり通らない……。できれば通りたくない……。神隠しの相次ぐ山の傍を通つたのだ。

と……。その時だった。

「…あれは…！？」

ガサガサと…山の方から草木を分けて…誰かがやってくるのが分かった。子供は恐怖からか、父親の足にしがみ付き隠れる。父親もまた、冷や汗を流しながらその光景をただ見ているだけだった。

（俺は…俺達はここで山の神だか化け物だかに連れ去られてしまうのか…！？せめて、この子だけでも逃がさなければ…！！）

わが子を思い何とかならないかと必死に頭をフル回転させるが…そんな不安は、現れた人物の容姿を見て消えた。

「…女の子…？」

白い着物に白い帯を見につけた…まだ若い少女。しかし、額からは鮮血が流れており、足元もおぼつかない様子。フラフラと…暫く歩いていたが…

「…！！お、おい大丈夫か！？」

少女は山から出たことを確認したと同時に、その場に倒れこんだ。男は自分の子供を抱えて慌てて少女に駆け寄る。見たところ、頭を強く打ち付けているらしく、額からは血が流れ出ている。他に、怪我をしているところは見受けられない。

「大変だ、すぐに医者に見せなければ…！！」

抱えていたわが子を降ろし、代わりに少女を横抱きに抱える。ふと見えた少女の瞳からは…痛々しいほどに涙が溢れ出ている。

「…神隠しの村からやって来た白い着物を身に纏った、紅い髪の少女…」

彼女は一体、何者なのだろうか？しかし男は、不思議とその少女が自分達に災厄をもたらす存在ではないとすぐに分かった。得体の知れない村からの、突然の来訪者。様子を見るかぎり…訳ありであることはまず、間違いないだろう。それでも、男には分かったのだ。この少女は、この村から逃げてきたのだという事が…。

「“麻生の血”も…たまには役に立つものだな…」

それは、今まで疎ましく思っていた“麻生^{あそう} 邦彦^{くにひこ}”の血縁としてもって生まれた力が、男にそれを知らせたのだ。

「この子はとりあえず連れ帰ろう。いつまでもここに居ては危険だ。さあ、帰るぞ…」

少女を抱え、我が子を促しながら…麻生の血縁者はその場を足早に後にした。

こうして…水落村から逃げ出した巫女・月成 雪華は…思わぬ形で命を救われる事となる…。

「…う…？」

「おお、目が覚めたかい？」

雪華は丸1日眠り続け…病院のベッドで目を覚ました。見知らぬ天井と見知らぬ男の顔に、不安そうな表情を見せる雪華に、男は安心させるように微笑む

「ここは病院だよ。私の町のね…。ちょっと待っていなさい、今先生を呼んでくるから…」

それだけを言うと、男は病室から姿を消す。雪華は男の背中を見送ると、ただぼんやりと…天井を見つめた。

「……村…？私の…村って…どこ…？」

そして、雪華は呟く。

「私の名前は……なあに……？」

雪華は……己の記憶のすべてを、無くしていた…。

戻ってきた男と、病院の医師の問いに…雪華は全く答えることが出来なかった。自分の名前、村の名前、家族の名前…。それどころか、自分が山を下ってきた事すら覚えていなかったのだ。

「先生、この子は…？」

「恐らく、頭を激しくぶつけた衝撃による記憶喪失だなあ…。」

不思議そうに外を眺めている少女。目覚めて初めて気付いた事だったが、瞳の色も…髪と同じ紅い色をしている。まるで日暮れのような綺麗な紅い瞳だった。

「麻生さん…あの子は…その…あの村の娘さんなのかい？」

「多分な。」

「…悪い事は言わない。村の入り口に戻してきたほうがいい…」

「何を言っているんだ先生！！怪我をして、しかも記憶を失っている子をまた捨てるというのか!？」

突然の大きな声に、雪華の肩が跳ね上がる。と同時に、大きな紅い瞳が不安そうに揺れた。

「…心配しなくても大丈夫だ。君に帰る家がないのなら、私の家に来るといい。」

「麻生さん…！！悪い事は言わない、よした方がいい…！！」

「先生、俺には分かるんだよ。あの子はきつと恐ろしい運命から逃げてきたのだろう。それでまた、あの山の入り口に戻ってしまったら…：それこそあの子は死んでしまう。これは俺の“血”が…：そう、言っている…。」

白い着物と白い帯。今では着物自体、着る者は殆ど居ない。しかし、少女は着物姿で山から下りてきた。しかも大怪我を負って…。何かから逃れてきたのだろう。何から逃れてきたのかは分からない。あるいは、自分の運命そのものから逃れてきたのかもしれない…。

「…麻生さんがそこまで言うなら、私はもうこれ以上止めないが…」

しかし、と医者は続ける。

「あの村の娘さんを匿うなら、どこか遠くに逃れた方がいい。でなければ、麻生さん…貴方がどうなるか分からない…」

この町は、水落村からかなり近い。少女の容姿は良くも悪くも目立

つてしまう。水落村の者達から見つかってしまったのも、恐らくは時間の問題だろう。

「そうだな…。幸い、仕事の件で近々都会の方に引越す事になっていた。好都合だ…」

偶然か必然か、男は数日後にこの町から去ることを決めていた。もしかしたらこれも、運命だったのではないのかと…男は思う。

「まあ、暫くは入院だ。少なくとも、麻生さんが引越すまでは安静にしておかなければ…」

「面倒を掛けてすまん、先生…」
「なあに、お前さんと私の仲じゃないか。」

医者は笑いながら男の肩を叩くと、そのまま病室を後にする。病室に残されたのは、男と少女…雪華だけ。

「…まだ、何も思い出せないかい？」

「はい…、ごめんなさい…」

今にも消え入りそうな声で謝る少女の頭を優しくなでながら、話を続ける。

「いいんだよ、無理をしなくても。君が嫌でなければ、俺の家に来ないかい？女房は君のような可愛い娘が欲しかったと…とても喜んでたよ。息子も姉ちゃんが出来たと大はしゃぎだ。」

「…宜しいんですか…？」

「もちろん…。一緒に来るかい？」

優しい瞳…。それが一瞬、誰かの姿と重なったような気がしたが…

誰なのか分からない。考えれば、まるで思い出すことを拒むかのように頭が痛む。案じた男は、無理はしなくていいと、少女を再びベッドに寝かせる。安心させるように手を握ってあげれば、少女は再び静かな寝息を立てて眠りについた。

「……謎の村から来た、髪と瞳の紅い娘、か……」

ちらりとテーブルの上に視線をやると、そこには彼女が着ていた着物と、彼女の持ち物。

「あの持ち物は……一体何だというんだ……？」

その持ち物とは、見た事もない石で切り出された小刀のようなものと、そして同じ石から切り出されたと思われるお守りのような石。だが、その2つからはとても大きな力を感じた。

「……君は一体、何者なんだい……？」

静かに眠る雪華を見つめながら男は呟くが……その答えが返ってくることは無かった……。

それから暫くして、男と男の家族、そしてそこに迎え入れられた雪華は町をあとにした。幸い、雪華の村の者に気付かれる事は無く、また町に雪華を探すものが現れる事もなかった。いや、単に気付かなかったただけだったのかもしれないが……それでも、麻生家の者達は必死に新しい家族を守り通した。そして……

「さあ、ここが新しい家だ……！！今日からは自由だぞ、朔夜……！！」

「はい…！！本当に、ありがとございます…！！」

「あらあら、硬いわねえ。私達は家族でしょ？敬語なんて要らないわ。さあ、朔夜…お片付けを手伝って？」

「……！！うんっ…！！」

「お…」

「…？なあに？」

「お姉ちゃんつて…呼んでいい…？」

「…もちろんだよ…！！」

雪華は自分の忘れた本来の名前を改め、“朔夜”と名乗ることにした。それは彼女がそう乗りたいと申し出たのだ。麻生家の者達は何故、雪華がそう願ったのかは分からなかったが…雪華の願いを聞き入れ、彼女を“麻生 朔夜”として迎え入れた。また、雪華自身も…何故、そう乗りたいと思ったのか…分からずにいた。

(…何でかは分からない。けれど…忘れちゃいけない名前のような気がした…だから…)

全ての記憶をなくしても、この名前だけは何故か…雪華の脳裏に刻まれていた。もしかしたらそれが自分の名前だったのかもしれないとすら思ったが…全ての記憶を無くしてる雪華に、それを知る術は無かった。

自分の名乗った名前が…自分を命がけて逃がしてくれた、本当の兄の名前であるという事も…。

すべてを忘れた雪華は…否、朔夜は…

(私は、今日から麻生 朔夜として生きていく…)

しっかりと自分の未来を見据えていた。

強く生きよう。

助けてくれた麻生家の人達の為にも、立派な人間になろう…。

それは、彼女が…最後に交わした兄との約束でもあり、彼女の決意でもあった…。

とある大学の校庭…。

「………つたく…何で私に付きまとうんだよ…。」

そこに、派手な紅い髪に紅い瞳の女が居た。深々と溜息を吐きながら、女は誰も居ない場所に視線をやり…心底めんどくさそうに話を続ける。

「いいか？私がお前を、態々あの世に連れて行ってやる理由があるのか？お前と私は縁者でもなければ知り合いでもない。あかの他人だろうが！！」

指をさし怒鳴る姿は、他人から見れば…随分と不思議な光景だろう。しかし、彼女には見えているのだ。他人には決して見えない…“あ

りえない者”達の姿が。

「分かつたらとつと目の前から消えてくれ。読書の邪魔だ……」

ひとしきり怒鳴り終えると、読んでいた本に視線を落とし、読書を再開する。しかし……そのものが彼女から離れる気配は……無い。

「……だあああつ！！……どうしてこうも、次から次に私のところに来る！？とつとと失せろつってんだろっがああ！！」

叫びながらその者を睨めば、臆したのだろうか……？スツと彼女の前から姿を消す。気配も完全に消えた。

「つたく……やってられるかっての……」

深々と溜息を吐く女性。

麻生 朔夜……現在20歳。あれから5年の年月が流れ、今では大学に通っている。相変わらず記憶は戻っていないが、理解力はとても高く……難関とされた大学にあっさり合格したのだ。それを、麻生家の父と母、そして弟はとても自慢に思っている。

しかし……彼女は家以外では、いつも孤独だった。

髪の色・瞳の色が気持ち悪い。

いつも誰も居ないところに向かって叫んでいる。
変な人。

そんな噂が流れ……彼女に近づく者は居なかった。容姿はとても美しい為、大学に入っつてすぐの頃は何人も男が彼女に近づこうとした

のだが、彼女のそんな噂を耳にして…自ら彼女に近づく者は居なくなつた。

しかし、朔夜はそれを悲観することなく…むしろ、他人と関わり合うことを苦手としていた朔夜にとつては好都合だといわんばかりに、その状況を受け入れていた。両親は心配していたが、朔夜は笑いながら「家族がいてくれるだけで十分だ」と…そう言った。

いつの間にか…口調も、女らしさの欠片もない口調になってしまつたが…それでも、家族は彼女の好きなようにさせていた。

彼女がのびのびと自由に出来るのであれば、ありのままに…。

それが、麻生家の願いだつた。

「あーあ、やっぱり幽霊達の間でも話つてのは伝わるんだなあ…」

朔夜の霊力は、年を重ねるごとに強くなり、気付いた時には被う力も身に付けていた。一度だけ…自分に近づいてきた霊を被つた事があつたのだが、それから…まるで自分も成仏させてくれと言わんばかりに、彼女を頼つて救われない魂達が彼女の目の前に現れるようになったのだ。それ以来、彼女は自分の力を使つていない。悟つたのだ。あまり…無闇に使つてはならない力なのだ。だが、父から「これだけは肌身離さず持つていなさい」と渡されたものがある。それは、朔夜が唯一…村から持つて出た、持ち物。何かの鉱石から切り出されたと思われる小刀の形をした石。そして、今はペンダントにしている…小刀と同じ石から切り出されたと思われる、お守りのようなもの。この2つを持ち歩くよう、父から言われたのだ。

「父さんは何であんなことを言つたんだ…?」

首に下げているペンダントを引っ張り出しまじまじと見つめると、それは紅く輝いている。まるで、朔夜の髪そして瞳のようだ…。朔夜自身、両親から聞くまでは知らなかったのだがどちらも朔夜のものであると知ったときは大層驚いた。てっきり、麻生家に伝わる家宝か何かだと思っていたからだ。

「まあ、持ってた落ち着くのは確かだけどな…」

それも自分の持ち物だからだと思えば納得できる。苦笑を漏らしながら、再びペンダントを服の内側に仕舞い込み、中断してしまった読書続ける。

全ての記憶をなくした水落村の巫女は…すべてを忘れて、それでも確かに自分の人生を歩んでいた。

同じ大学のとある教室…。

「この本は中々興味深かったな…」

「僕も。けどもう少し詳しく書かれてるかと思ったよ…」

「そうか？俺は十分だと思ったんだけどなあ…」

そこには2人の男子学生。天倉 螢、そして麻生 優雨がそこにいた。2人は年こそ離れているものの、高校時代からの友人で先輩後輩の関係ではなく親友として…普通に接している。高校のときに住んでいた寮の部屋が同じだったということもあり、2人の距離は年齢とは関係なく縮んでいった。螢が民俗学に興味を示し始めた頃、優雨もまたそんな螢に影響を受けて民俗学や自分の家系に繋がる話

に興味を持ち始め、螢が大学に入学した後、自分も同じ大学に入学して色々な事を学ぶことを決めた。偶然にも、入ったサークルも同じで「これはもう腐れ縁だな」と螢が笑いながら言ったのは…まだ、記憶に新しい。

そして…

「ところで、螢？あのさ…」

「優雨、何も言わないでくれ。分かってるから…」

「ならいいけど…螢も大変だね」

「何で俺ばっかりなんだ、いつも…」

螢の持つ、ありえない力も…優雨は理解している。もつとも、優雨にもその力が僅かながらにあるためすぐに理解が出来たのだ。“麻生”の血が…優雨にありえないものを見る力を与えた。そして螢は…

「俺は抜えないと言ってるだろう…」

優雨の力をはるかに凌ぐ、とても強い霊能力を持っていた。しかし、本人も言った通り抜う力は全く無く…霊に付きまとわれては永遠と言葉で説得して離れてもらう…ということを繰り返していた。何故、自分がこんな体質になってしまったのかは分からない。優雨のように血筋が関係しているわけでもなく…天倉家では螢だけが強い力を持っていたのだ。もつとも、螢の姪にあたる双子の女の子も強い霊能力を持っているのだが…それはまた、螢とは違う理由がある。ともあれ、純粋な天倉家の血筋で強い霊能力を持つのは螢のみなのだ。

「僕もそういう力は無いし…」

「毎度この調子じゃ本当に疲れる…」

はあ、と溜息を吐く螢を見て…ふと、優雨はある人物を思い出した。それは、自分の従姉の存在。実際、養子として迎えられた為血縁関係は無いのだが…その彼女も、強い力を持っている。そして、彼女は優雨や螢と違い被う力を持っている。

しかも、偶然か必然か…彼女もまた、この大学に通っているのだ。

「螢、もし困ってるならいい人を紹介してあげるよ。」
「いい人？」

「僕の親戚…といっても養子だから血縁関係は無いんだけど、凄く強い力を持つてる人がいるんだ。女の人なんだけど、いい人だよ。まあ、ちよつと…人間嫌いな面があるけどね…」

「人間嫌いのいい人って…それ、いい人の部類に入るのか？」
「いい人だよ、少なくとも僕には…」

困ったような笑みを浮かべる優雨になるほどと頷く螢である。血の繋がりが無いといっても、親戚ならば人間嫌いもなにも無いだろう。

「しかも同じ大学なんだ。何度かすれ違って話したことがある…」
「本当か？」

「うん。学科は…」

優雨が自分の従姉の詳細を話すと、螢は訝しげな表情を見せた。どうしたものと優雨が首を傾げると、螢が口を開く。

「彼女の事は知ってるぞ？俺と同じ学年で…同じ学科。よく顔を見るが……」

「いつも1人。誰も近づけない雰囲気をかもし出してる…でしょ？」

「ああ…。目立つ容姿だから優雨に特徴を聞いてすぐに分かったよ。しかしまさか、彼女がお前の親戚だったとは…」

そして霊を祓う強い力を持つていたとは…。本当に、繋がりとは不思議なものだと螢と優雨は笑う。優雨はすぐにも呼んでこようか？と言ってくれたが、自分が頼む身分で呼び出すような真似は失礼だと思つた螢は、学科が同じだから顔を合わせたときにでも頼んでみると優雨に話す。

と…その時だった。

「……ん？離れた…？」

「みたいだね…」

さつきまで螢に憑いていた霊が螢から離れていく。何故だろうと漏らす優雨に、螢は納得したように苦笑した。

「多分、俺達の話聞いていたんだ。そして…」

「彼女の所に行った…？」

「恐らくな」

霊達は自分の事が見える人間に憑くことが多い。より強い力を持つ人間に付きまとい、自分の思いを伝えようとする。しかし、力を持つている人間の全てにその力があるかと言われると…答えは否だ。しかし、霊達にはそんな人間の事情など関係ない。とりあえず、強い力を持つ人間に憑く。そして何とかして欲しいと願うのだ。だが…どうやら今回は、螢達の話聞いたことにより、螢以上に強い力を持ち、そして自分達の話聞いてくれる人がいると判断したのだろう。向かった先は、考えなくてもすぐに分かった。

「なんだか悪い事をしてしまったな…」

霊が勝手に行ってしまったので、仕方が無いと言ったら仕方が無いのだが…結果、まだまともに顔も合わせたことの無い人に押し付けるような形になってしまったと螢は苦い顔をする。一方の優雨は、別の意味で難しい顔をしていた。

「参ったな…」

「ん、どうした優雨？」

いや…と、苦笑を零しながら…

「彼女は被う力は持っているんだけど…実際、その力は使わないんだ。1回使っただけでその後は全然使ってないって…。近づいてくる霊は怒鳴って追い返してるって言ってたかな…」

そう言った。更に螢は…苦虫を噛み潰したような表情をする。

「悪い事をしてしまったな…」

果たしてこれは…優雨の親戚に対して言っているのか…それとも、霊に対して言っているのか？その真意は、螢にしか分からない…。

そんなやり取りがあったなど知るはずも無い、優雨の親戚の元には…

「……………ツ…次から次へと、よくもまあっ…!!！」

螢に憑いていた霊が、希望の眼差しで彼女の…朔夜の元へとやって来ていた。

「おい、誰から聞いた？そいつをとつちめてやる…」

霊をギロリと睨めば、すっかり怯え上がり…言葉を発する。朔夜にしか聞こえない“こえ聲”を…。それを聞いた朔夜は、深々と溜息を吐いた。

「優雨が…。つたく、優雨の奴何を考えているんだ…？」

思わぬところで親戚の名前が出て、朔夜はどうしたものかと腕組をする。優雨から頼まれたとあつては無下に追い返すわけにもいかない。かといって、力を使いたくも無い…。

「さて…どうしたものか…」

再び深い溜息を吐き、読んでいた本にしおりを挟んで閉じた時だった。

「あ、やっぱりここに居た。やあ、朔夜。」

「優雨…お前だろう、こいつを私の元に送ったのは…」

「うーん、正確には僕じゃなくて…」

「は？」

「どうも…」

「…誰？」

自分の親戚である優雨が1人の見知らぬ男と共にやってくる。あからさまに、朔夜の表情が変わったことを察した優雨は苦笑しながら、螢にそつと耳打ちをした。

「まあ、頑張つて」

「ちよ、優雨!？」

「じゃあ僕はそろそろ時間だから。後は2人で解決してよね？」
「こら、待て優雨！！私は…！！」

静止する朔夜の言葉を綺麗にスルーして、手を振りながら去っていく優雨。その様子をポカンと見つめる螢と、ワナワナと拳を震わせながら怒りの視線を送る朔夜。

全く違う反応を見せる2人。

これが…麻生 朔夜と天倉 螢の…初めての出会いだった。

続

【一ノ刻】01：決別と出会い（後書き）

はい、始まりました零長編！！（笑）暫くはゲーム本編の要素は殆ど無いと思います^^；まずはヒロインと螢達を出会わせることが目的です^^一ノ刻は出会いの話が中心です

まあ、今回の小説では…螢にはちょっとかっこよく立ち回ってもらおうと思っております（笑）ヘタレじゃない螢さんをこっごご期待
といっても…私の文才じゃ無理があるかもですが…^^；

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8728s/>

【零長編小説】白き華舞う刻

2011年9月17日02時21分発行